

2010年(平成22年)
第33号
(9月15日)



発行所：立正校成会 京都教会
発行責任者：渉外部長 宮地啓安
〒605-0041 京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211 FAX (075)762-2266

宗教者の連帯による世界平和を ～WCRP 40周年を迎える～

世界の宗教者が宗派を超えて協力し、平和のために活動している世界宗教者平和会議(WCRP)が発足してから40周年を迎えた。本紙前号にて京都と奈良で実施される記念事業を紹介した。

庭野日敬開祖が、真の世界平和を目指して設立を働きかけて生まれたWCRP、世界規模で宗教間対話を促進し、長年の活動により国連のNGOとして経済社会理事会で総合協議資格が与えられるまでになった。

今回は、WCRPの40年の歴史を振り返ることにした。

- 1982年 第2回国連軍縮特別総会(SSDⅡ)でホーム・ジャックWCRP国際事務総長が演説
- 1984年 WCRPⅣ(ナイロビ大会)開催
- 1988年 第3回国連軍縮特別総会(SSDⅢ)でジョン・テラーWCRP国際事務総長が演説
- 1989年 WCRPⅤ(メルボルン大会)開催
- 1990年 ユニセフの要請を受け「子供のための世界宗教者会議」を主催(プリンストン)
- 1994年 WCRPⅥ(ローマ、リバ・デ・ガルダ大会)開催
- 1995年 国連経済社会理事会NGO(カテゴリーⅠ)に昇格
- 1996年 ユネスコ(国連教育科学文化機関)よりNGO諮問機関の正式承認を受ける
- 1999年 WCRPⅦ(アンマン大会)開催
- 2006年 WCRPⅧ(京都大会)開催



WCRPⅧ(京都大会)

WCRP 40年の歩み

- 1970年 WCRPⅠ(京都大会)開催
- 1973年 国際経済社会理事会よりNGOカテゴリーⅡの資格を受ける。
- 1974年 WCRPⅡ(ルーベン大会)開催
- 1978年 第1回国連軍縮特別総会(SSDⅠ)で庭野日敬WCRP国際名誉議長が演説
- 1979年 WCRPⅢ(プリンストン大会)開催

新宗連青年会

たすきりレー京都教会に

8月14日夜、東京・千鳥が淵墓苑を出発した、新宗連青年会による「プレたすきりレー」の一行が、9月5日夕方、京都教会に到着した。「広島原爆の残火」「長崎を最後の被爆地とする誓いの火」「千鳥ヶ淵平和式典での献灯の火」を分灯した懐炉を手に、大阪を目指して、たすきを繋いでいる。

ARM DOWN!キャンペーンをPRしながら、8日に目的地の大阪に到着した。



9月5日夕到着



6日早朝出発

誓願目標15万署名を達成 ARMS DOWN!キャンペーン

9月1日、中村教会長から、京都教会が取り組んできたARMS DOWN!キャンペーンの署名数が、当初目標としていた15万人を突破したと発表があった。清水寺をはじめ、京都市内の有名寺院の境内や門前での署名、宗教界の方々や議員懇話会の議員の方々の協力に



15万人の署名

よるものだ。何より15万人の平和への思いにふれて、署名運動に参加した会員も大きな喜び(※)を得ることができた。

(※) <http://rkk-kinki.blog.ocn.ne.jp/kyoto/>をご覧ください。

時事刻々

今年の夏は記録的な猛暑だった。エアコンや飲料水などの販売は好調だったようだが、円高の影響もあり、景気は冷えたままだ。

加えて、八月の熱中症の搬送者が昨年の四倍、二万八千人。死者は六十人で昨年の八倍だった。そのため、外出を控えた人も多く、街中の人出は少なかつたようだ。

気象庁は、「三十年に一度の異常気象」との見解を発表した。都市部のヒートアイランド現象も気温上昇の原因と指摘されている。

また、地球温暖化の影響で、猛暑が常態化するという説もある。この猛暑は温暖化対策を急げという警告かもしれない。

残暑厳しいものの、九月に入って、かすかに、秋の訪れを感じさせてくれる。もうすぐ、彼岸だ。

「暑さ寒さも彼岸まで」いまま少しの辛抱かな。秋恋しいのは人だけではないだろう。

「鳴けよ虫 秋が鳴ずに居らりふか」(一茶)

戦争犠牲者慰霊・平和祈願の日 ～花垣ルミさん平和の誓いを語る～

8月15日、京都教会において、戦争犠牲者慰霊・平和祈願の日の式典が実施された。今年、WCRP 40周年の年であり、核廃絶・軍縮推進のための「アームズダウン・キャンペーン」が展開されている。この時期にふさわしく、当日の式典において広島において被爆経験を持たれ、京都市に在住の花垣ルミさんの講演が行われた。

花垣さんは5歳のとき、爆心地から約1・7キロの親類宅（疎開のため）で爆風に吹き飛ばされ、タンスと窓の間に挟まれた。竹のくさびが頭に刺さった傷跡がいまも残る。

14歳のとき、別の親類を頼って京都に移り生まれ

た。2003年の原爆の日、38年ぶりに広島を訪れ、平和記念式に参列し、故郷の街や川を見たとき、封印していた記憶が一気によみがえった。がれきの中でわが子を捜す母親、次々と運ばれる死体を焼くにおい……。 「苦しみから逃げずに伝えなければ」と考え、被爆証言をするようになった。

ご自身の被爆体験の紙芝居を持って、世界各国で、被爆体験を伝えている。憎しみを越えて、核兵器のない平和な世界にしていこうと、決意を語っておられた。



教会玄関前に白やピンクの蓮の大輪

今年初めて蓮作りに取り組む京都教会の玄関前で、今夏、白やピンクの花が大輪を開かせ、人々の目を楽しませている。

泥中に咲く蓮の姿を通して法華経の精神を再確認しようと、会員たちが試行錯誤の中、丹精込めて育てている。

つぼみが開くたび会員たちから歓声が上がり、道行く観光客らは足を止めて涼しげな光景を写真に収めていた。



少年少女フェスティバル

8月28日、岸和田市の浪切ホールに於いて、立正佼成会近畿ブロック主催の少年少女フェスティバルが開催された。今年のメインテーマは『チャレンジ・みんなでわになろう』。近畿11教会が日頃の活動成果を発表する場として年一回行われている。

京都教会は、ティンクバトン・鼓笛隊・そして少年部総出演でよさこいソーランを皆で披露した。ティンクバトン・鼓笛隊は一年間を通して練習を重ね、また当日までの毎月の少年部集合日で気持ちを一つにし、感動の発表となった。バトン責任者は、「笑顔一杯の発表と『和』を大切に出来た」と感想を語った。

●弥勒（みろく）のお役

佼成会のことば（行法ガイドブックより）

「弥勒」とは弥勒菩薩のことで、慈悲の象徴といわれています。『法華経』の中で、弥勒菩薩は身の回りに起こる不思議な現象に対して、その都度、一同を代表して釈尊や文殊菩薩に質問します。よく、「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」といわれますが、聞きたいけれども恥ずかしくて聞けないということを多くの人が経験していることと思います。そんな時に、弥勒菩薩のような人が現れ、周囲の様子や人の心を察して、何も分からないもののように謙虚になって質問してくださる。その質問によって聞いている私たちも理解することができたということがよくあります。しかし、弥勒菩薩のような方ばかりに頼っていてはいてはけません。自らが人の心を察して、「弥勒のお役

を担わなければならないのです。そういう人は、社会の中でも潤滑油のような働きをするのです。明るく、平和な社会をつくっていく上で、「弥勒のお役」というのは重要な役割を果たします。

また、その人にとってはあまりありがたくないような状況——たとえば、失敗したり、みんなの前でご功德をいただき卑屈になっているという現実があっても、その縁に触れた私たちは「あの人ではないんだ。あの人をとおして私にも至らないことがあると仏さまは説法してくれているのだ」と受け取り、その人の仏性を拝んでいきました。そのような悟りができない時には、先輩幹部が私たちに「あの方は弥勒のお役を果たしているくだよ」とかみしめてくれました。このように卑屈になって沈み込んでいる人を「弥勒のお役をしてくれている」と拝んでいくことによって、その人も教えをつかみ、立ち直っていったのです。こうして、みんなが法を共有していきました。

エコキャップ回収状況

7月末現在

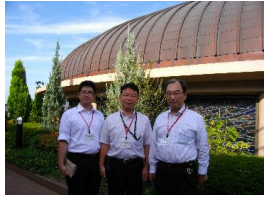
24,800個

(ワクチン31人分)

地域を越えた交流を 校成議員交流会開催

8月28日から29日の2日間、本会本部において「議員交流会」が開催された。京都からは隠塚京都市議会議員、堤長岡京市議会議員の2名が参加した。

2年に1回開催されるこの「議員交流会」は、地方議員を対象に、本会への理解を深めることと、都道府県・教会を越えた交流を目的として実施されている。



1日目は、東京工業大学名誉教授・森政弘氏の講演と夕方に懇親会が行われ、2日目は、本部施設の見学、数人ずつ集まって情報交換会が行われた。

本会草創の願いを新たに 脇祖さま報恩会

9月10日、京都教会において「脇祖さま報恩会」が開催された。脇祖・長沼妙俊は、開祖・庭野日敬の導きにより、法華経に出会い、本会創立以降は、開祖の指導を身をもって示して法の証明役に徹して、本会の基礎を築かれた。1957（昭和32）年9月10日、67歳で遷化されたが、本会の発展に大きく貢献し、多くの人々の幸せのために身を尽くした慈悲の生涯を讃え、毎年「報恩会」が実施されている。

今回は、古賀元教会長の講演があり、本会の草創期の方便時代から久遠本仏建立されるまでの、脇祖の慈悲深さが伝えられ、「本物の信者」になれと説かれた。

庭野開祖の宗教観・平和観 「一乗の道」

《1%の可能性》

イランは、イスラム教シーア派の最高指導者であるホメイニ師のもとに、新しい国づくりを始めたばかりの国であった。その国の最高指導者が、外国の大使館員を五十余人も人質にするような暴挙を認めている事情が理解できない。まず事態を正しく把握しなければならないと、庭野開祖は様々な人に会って事情をつぶさに聞いた。

パーレビ前国王は、莫大な個人資産を海外に持ち、さらに石油輸出によって得た豊かな資金で、欧米とくにアメリカを手本にした近代化を進めて、その国づくりのなかでイスラムの影響力を極力排除しようとしてきたようであった。その近代化政策によって、ホメイニ師は一時、国外に追放されていた。だが、近代化の行き過ぎについていけなくなったイランの民衆が、信仰を中心にした国づくりを訴えるホメイニ師に呼応して、パーレビ国王を追い出し、ホメイニ師を亡命先のパリから迎えて最高指導者としてイスラム共和国を発足させたのであった。

学生グループのアメリカに対する抗議行動は、このイラン革命によって追放されたパーレビ前国王が、国王派の軍人に命じてイラン各地で反革命をたくらんでいるとして、その亡命をアメリカが受け入れたことに対するものだった。庭野開祖は、京都会議に参加したイランの宗教者に連絡をとってみた。だがイラン革命で行方がわからない。意を決して、カーター大統領とホメイニ師に直接、手紙を書いた。

カーター大統領に対しては、パーレビ国王を米国に入れられないという約束を破ったことがイランの国民感情を刺激していることを述べて、「パーレビ国王の健康

状態が許すのであれば、米国外に移してほしい」と要請し、またホメイニ師に対しては、「イラン国民の気持ちは理解できるが、大使館員を人質に取るのは国際法に違反しており、このようなことを続けていたのでは、貴国は世界の孤児になってしまう。言うべきことは国連の場で主張すべきだと思うから、どうか善処してほしい」と訴えた。

折よく大平正芳首相が、アメリカ、カナダ、メキシコ三国を歴訪し、カーター大統領とも会われると聞いたので、大統領宛に出した書簡の内容について説明し、「くれぐれも念を押していただきたい」とお願いした。また、たまたま註イラン大使の和田力氏が帰国されていたので、お会いしてイランの実情を聞き、さらに駐日イラン大使のサレフー博士を訪ねて、膠着した事態打開の可能性を探ることにした。

だがその矢先、アメリカが人質救出作戦を執行してしまったのである。大型ヘリコプター八機をつぎ込み、夜陰に乗じてテヘラン郊外の砂漠地帯に着陸し、ジープを駆って一気にアメリカ大使館に突入するという奇襲作戦だったが、暗夜のためヘリ同士が空中衝突をして、作戦は失敗に終わってしまった。これによってイランの態度はさらに硬化し、事態は最悪の状態になった。

庭野開祖が駐日イラン大使館にサレフー大使を訪ねると、案の定、大使の態度はきわめて強硬だった。パーレビ前国王時代にアメリカが行ったさまざまな工作、CIA（米中央情報局）とつながったイラン秘密警察による弾圧などを、強い口調で語った。サレフー大使はホメイニ師の側近として、ホメイニ師がパリ亡命中は広報担当者をしていただ。（つづく）

今月は「仏教を生活に生かす「日常生活の中の仏さまの教え」」、「他教団活動紹介」、「私たち kinki.genki」をお休みさせていただきます。

今月の言葉 ～9月のブログより～ 京都教会長・中村憲一郎

今月の会長法話は、「好き嫌いをなくしていく」です。「どうしたら楽しく生きていけるか」――それが今月の基調テーマです。

人にはみな、苦手な人や反りが合わない人がいるもので、その人のことを考えるだけで憂鬱になり、会えば不愉快になり、いざこざが絶えません。

こうした当たり前とも思われる好き嫌いの感情が、現代社会においては、深刻な人間関係の悩みを引き起こしています。仏教ではそのことを「怨憎会苦（おんぞうえく＝怨み憎む人や苦手な人やことに出合う苦しみ）」といい、「生老病死」の四苦に加え、八苦の一つに数えています。

では、対人関係の好き嫌いをなくす道はあるのでしょうか。あるのです。会長先生は「こうした感情的な苦は、自分のものの見方、考え方を換えれば、解決する」というのです。つまりその人の見方しだいと言うのですね。具体的には、まずは「この人はいやだ。苦手だ」と決めつけないことです。

致知出版社の本「心に響く小さな5つの物語」の中に次の文が掲載されています。

少年は両親の愛情をいっぱいを受けて育てられた。ことに母親の溺愛は、近所の物笑いの種になるほどだった。その母親が姿を消した。庭に造られた粗末な離れ。そこに籠もったのである。結核を病んだのだった。近寄ると周りは注意したが、母恋しさに少年は離れに近寄らずにはいられなかった。しかし、母は一変していた。少年を見ると、ありったけの罵声を浴びせた。コップ、お盆、手鏡と手当たり次第に投げつける。青ざめた顔。長く乱れた髪。荒れ狂う姿は鬼だった。少年は次第に母を憎悪するようになった。哀しみに彩られた憎悪だった。少年6歳の誕生日に母は逝った。

「お母さんにお花を」と勧める家政婦のオバサンに、少年は全身で逆らい、決して柩の中を見ようとはしなかった。

父は再婚した。少年は新しい母に愛されようとした。だが、だめだった。父と義母の間に子どもが生まれ、少年はのけ者になる。少年が9歳になって程なく、父が亡くなった。やはり結核だった。

その頃から少年の家出が始まる。公園やお寺が寝場所だった。公衆電話のボックスで、体を二つ折りにして寝たこともある。そのたびに警察に保護された。何度目かの家出の時、義母は父が残したものを処分し、家をたたんで蒸発した。それからの少年は施設を転々とするようになる。

13歳の時だった。少年は知多半島の少年院にいた。もういっばしの「札付き」だった。ある日、少年に奇蹟の面会者が現れた。泣いて少年に柩の中の母を見せようとしたあの家政婦のオバサンだった。オバサンはなぜ母が鬼になったのかを話した。死の床で母はオバサンに言ったのだ。

「私は間もなく死にます。あの子は母親を失うのです。幼い子が母と別れて悲しむのは、優しく愛された記憶があるからです。憎らしい母なら死んでも悲しまないでしょう。あの子が新しいお母さんに可愛がってもらうためには、死んだ母親なんか憎ませておいたほうがいいのです。そのほうがあの子は幸せになれるのです」

少年は話を聞いて呆然とした。自分はこんなに愛されていたのか。涙がとめどなくこぼれ落ちた。札付きが立ち直ったのはそれからである。

作家・西村滋さんの少年期の話である。（後略）

この物語は、言葉や現象の表面だけを「決めつけて」見ると、見えてこない世界があることを教えてくれます。喜怒哀楽の向こうにあるものに思いをはせる、そんな見方が大事なのですね。法話では他にも「すべてのご縁は、自分をつくる養分になる」という見方。さらには「お釈迦様（尊敬する人）ならどう見るだろう」と自問してみる考え方。そして、人生の大局観に立って、あるいは達観して見る見方も紹介しています。

結びに「仏教は、相手を変えるのではなく、自分を変えてどのように受けとめ、実践するかを教えるのです。嫌いな相手は、自分の私の強さを教えてくれる恩人であり、心を磨く砥石のような存在と受け取れると、楽しく生きていける」と「楽しく生きる」心の秘訣を教えて下さっています。

常に心に銘記し、精進して参りましょう。

渉外部からのメッセージ

高齢者の所在不明問題が毎日のように報道されています。法務省によると、戸籍上は生存しながら所在不明の100歳以上の高齢者は全国で23万人以上おられます。それよりも衝撃的だったのは亡くなった親を自宅の押入れの中に保存しておいたケースが多いこと。自分の親が腐り異臭が発生していく様をどのよう

な精神で見続けていたのでしょうか。最近では耳にしなくなりましたが「向三軒両隣」で声掛け合って助け合っていく社会が失われている表れかもしれません。本会では人々とのご縁を大切にと教えています。

この月報を読まれて感想などがありましたらお気軽にお寄せ下さい。 RKK 京都教会 FAX 075-762-2266